

中越遺跡範囲確認調査報告

昭和54年3月

長野県上伊那郡宮田村教育委員会

序

中越遺跡は大正の末に、鳥居龍藏博士によって発見された。

昭和27年、藤沢宗平先生によって、第一次の発掘がなされ、爾来昨年10月の第九次発掘までに、繩紋前期初頭の住居跡が実に95軒に達し、一大集落跡であることが確認されるに至った。

此の間、八幡一郎教授や、国立奈良文化財研究所長坪井清足先生、また文化庁調査官小林達夫先生などのご指導を受け、膨大な遺物や記録の整理をすすめてまいり、近く報告書の刊行の運びとなつたことは欣快に堪えない。

近時我が村も都市化が進み、宅地造成等により、この遺跡も四圍から次第に侵食されて、この儘の状態が続ければ、文化財保護の見地から、憂慮すべき事態も考えられるので、永久保存の計画樹立のため、昭和53年度国県の補助事業として、中越遺跡分布確認調査を実施した。

この報告書は、その概要を纏めたものである。

初冬の寒さの中で、誠身的にご尽力を賜わりました調査団長友野良一先生をはじめ、調査員各位や、県教育委員会の諸先生のご指導に対し、深甚なる敬意を表し、もって序となす次第である。

昭和54年3月

長野県上伊那郡宮田村教育長 林 金 茂

例　　言

1. 本書は、宮田村教育委員会が昭和53年度国庫補助事業として計画し、実施した中越遺跡範囲確認調査報告書である。
2. 調査は中越遺跡調査団に委託した。
3. 本書の執筆は、調査団を代表して友野良一が当った。
4. 調査に当り、土地の所有者ならびに居住関係の各位には、多大な御配慮を戴いたことを銘記してお礼としたい。

伊藤務・本田真・高橋清八・有加勝司・小田切鉄男・池田五郎・酒井愛子
飯島金二・平沢武彦・山浦政治・大下平八・木下岩雄・松田克治・樋口正夫
・伊藤柳治・江口勝三・小松浅勝・鈴木末男・下井一郎・大蔵重樹・羽場勝美
・榎本義男・塙川征二・本田甲子雄・久保田秀司・近藤源藏・矢田尊一
・馬場義文・橋倉一良・小田切正義・三浦正吉・窪田謙・間山みつゑ
・吉沢力・立花精一・唐木保・新井正三・浦野治郎・田中吉郎・宮下富之進
・竹松久男・太田英聯・唐木達雄・加藤広治・川手順一・斎藤和章・清水定良
・武井利夫・滝沢節男・大西清・白川達夫・竹松安義・小林昭洋・白井長治
・浦野庄衛・唐沢兵二・飯島光治・片桐貞治・酒井恭一・豊岡外藏
・飯島勉・手塚弘・馬場武男・鳥羽英夫・唐木愛男・池上敏・新谷節夫・宮本芳弥
・林有則・中西英夫・吉川定男・小平守・伊藤種男・長崎紀夫・間山さた子
・原田丑五郎・田中宗一・飯島建一・原田美二郎（順不同）

5. 発掘に参加された方々は下記の通りである。
大沢実・小松博子・小松英男・藤川周一・墨矢勇夫・伊藤柳治・春日松巳
・本田甲子雄・北沢武雄・保科兼雄・加藤大八・鳥羽英夫・小松為雄・平沢
八千子・小田切房子・林美弥子・小松二三子・宮沢市雄・白鳥あき子・太
田利雄・春日宗・木下進・春日修一・保科義重・酒井伝恵・保科徳子
6. 整理作業で特別御協力をいただいた方々は、大平聰・辰野美佐子・小木曾
清・保科徳子・丸山弥生・伊藤雅一・大沢重男・三沢恵・椎野美佐子・高井
純子・墨矢勇夫の諸氏には文字通り陰の支えになって戴いたことに対し、心
より深く感謝の意を表するものである。

目 次

序

例 言

(1)はじめ	1
(2)中越遺跡研究のあゆみ	2
(3)遺跡の立地	3
(4)調査地点の配置と調査坑	4
(5)土層の堆積状態	10
(6)遺物の包含状態	10
(7)遺構・遺物の状態	12
遺構	12
遺物	13
(8)結び — 遺跡の範囲	30

図 版 目 次

- 図版 1. ①遺跡遠景(東方より)
 ②遺跡遠景(東方より)
図版 2. ①遺跡遠景(西方より)
 ②遺跡遠景(南方より)
図版 3. ①②③調査坑出土状態
図版 4. ①②③調査坑出土状態
図版 5. ①②③調査坑出土状態
図版 6. ①②③調査坑出土状態
図版 7. ①②③調査坑出土状態
図版 8. ①～⑧調査坑遺物出土状況
図版 9. ①②③調査坑遺物出土状況
図版 10. ①②③調査坑地層図
図版 11. ①②③調査風景
図版 12. 繩文前期の遺物
図版 13. 1. 2繩文中期 3. 4弥生前期

挿 図 目 次

- 第 1 図 位置図
第 2 図 調査地点配置図
第 3 図 原始掘遺構図
第 4 図 土層の柱状図
第 5 図 土層の柱状図
第 6 図 土層の柱状図
第 7 図 土層の柱状図
第 8 図 土層の柱状図
第 9 図 1区出土遺物
第 10 図 2区出土遺物
第 11 図 遺跡区分図

(1)はじめに

中越遺跡の保存問題は、西原地籍の住宅用地開発計画が具体化したことによるものである。そもそも中越遺跡は、昭和30年末より20余年の長い期間にわたって、地道な学術調査が積重ねられて来た日本における数少ない縄文前期前半の大集落址である。特に東西両文化の接触が生んだ様々な文化様相が窺える点で重要な遺跡である。しかしながら、宮田村がかかえている土地利用計画も理解できる反面、この遺跡の保護保存運動との間に競合が起きるのも致し方のないなりゆきといわざるを得なかった。

昭和53年4月、関係当局から計画案が示されるにおよび、地元研究者による保存運動が表面化し、村当局に保存のための強い要望がなされた。村教育委員会は県文化課と再三にわたり保存処置について打合せを行った。その結果、国・県より補助を受け、発掘調査が行われることが決った。しかし遺跡の実態、とくに遺跡の範囲が確認されていない段階にあっては、保護保存の問題も、土地開発の問題も具体化することは困難であった。そこで県文化課の見解に従い、遺跡の範囲確認調査を実施し今後の協議・検討の基礎的資料を作ることになり、昭和53年度の国庫補助事業として今回の調査が行なわれたのである。

調査は、中越遺跡調査団を10月に結成し、事務局を宮田村教育委員会に置いた。調査団の構成は次のとおりである。

中越遺跡調査団

顧問	向山雅重	宮田村教育委員長
团长	友野良一	日本考古学协会会员
調査員	丸山弥生	上伊那考古学会員
	和田武男	長野県考古学会員
	赤羽義洋	"

調査員	小木曾 清	宮田村考古友の会々長
事務局	林 金茂	宮田村教育長
	森 下 清	宮田村教育次長
	古河原 正治	宮田村教育委員会
	竹松 正恵	"

(2) 中越遺跡研究のあゆみ

中越遺跡が遺跡として知られたのは、大正末年、鳥居龍藏博士が「先史及原史時代の上伊那」編集のための調査の際確認され、その後、昭和 27 年になって「信濃史料」編集の折、再び注目された。その頃より上伊那考古学会員による遺物の表面採集による調査が始まっていた。ところが昭和 30 年に宮田中学校の建設工事が行なわれると、道路の断面に多数の住居址断面が露出したのである。その際多くの土器や石器が採集されたが、その土器については極めて特徴のあるものであることがわかり、恐らく縄文前期関山式並行の特有の土器であろうと考えられるようになつた。

昭和 31 年 11 月、上伊那考古学会のメンバーと藤沢宗平、樋口昇一氏らによって第 1 次発掘が行なわれた。この発掘では第 1 号住居址一軒を発掘し、他に二軒の住居址が存在することを確認するにとどまつたが、続く昭和 32 年 3 月、第 2 次調査が行なわれ第 2 号～第 4 号住居址を発掘し、縄文時代前期の集落址として把握されるにいたつた。

その後遺跡内に宅地化が進んできたため、昭和 43 年、44 年の二回にわたって広範囲な発掘が行なわれ(第 3 次、第 4 次調査)、その結果第 52 号までの住居址を発掘または確認したのである(図 2)。この 2 回の発掘によつて、中越遺跡は住居址数の多いことでは、他に類例を見ない「大集落址」とし

て確認されることとなった。この発掘の成果により昭和45年に宮田村福祉センターで開かれた「中越遺跡をめぐる諸問題」と題する長野県考古学会第四回シンポジウムが開かれたが、結局は「土器論」に終止した形となった。その後、渡辺誠氏により研究上の方法論の欠陥が指摘されることとなった。

第3次、第4次の調査以後より、大規模の圃場整備事業に伴う発掘と中央道建設のための埋蔵文化財包蔵地の調査が進められる中で、昭和52年12月同村内に所在する縄文時代草創期の向山遺跡の保存問題をきっかけに、中越遺跡の国指定の論議がもちあがり、中越遺跡は保存の方向に進むこととなったのである。

そして、昭和51年8月、中越遺跡の本格的な整理作業を前に第5次の調査が行われ、その後、住宅建設などに伴い第7次、第8次の発掘が行われた。

中越遺跡はこれらの発見以来、特徴的な土器解明のため発掘が進められ、大規模な発掘によってその集落としての認識がなされ、第5次の調査以後は保存を前提として、研究上の方法論的な問題をも含んでの研究が進められてきた。

昭和53年度は、国・県の補助事業として遺跡範囲確認調査が実施されたが、その結果総計95軒の住居址が発見された。中越期の遺跡の面積は約5.44ヘクタールに分布していることも確認することが出来た。

(3) 遺 跡 の 立 地

中越遺跡は、長野県上伊那郡宮田村中越にあって、伊那谷の他の多くの遺跡と同様、天竜川によって形成された河岸段丘上に立地する(図1)。この中越の段丘は中央アルプスの山麓より流れる天竜川支流小田切川によって、中越遺跡の南方1.5キロメートルに位置する駒ヶ原南遺跡の立地する駒ヶ原段丘と

区別される。北側は同じく山麓より流れる大沢川を境に伊那市赤木・下牧地籍と行政区区分がなされている。従って中越遺跡は、山麓より伸びる狭長な台地のほぼ中央やや東寄りに展開していると言える。一方駒ヶ原南遺跡及び駒ヶ原下遺跡は、中越の段丘と平行して同じく東西に細長く、その南側は中央アルプス木曾山脈の主峰駒ヶ岳より流れる大田切川によって深く開析され、伊那谷特有の典型的田切地形を呈し、現在でもなお交通の重大な障害となっている。



第1図 遺跡の位置図

(4) 調査地点の配置と調査坑（第2図）

過去の調査の知見から、中越遺跡の中心部は、現宮田村役場の東北部で、北は大沢川右岸河成段丘上まで、東は伊那市西春近の赤木・下牧両部落に通ずる道路（通称赤木線）まで、南は中越北縁道路まで、西は現平沢製作所に通ずるあぜ道まで約1.6ヘクタールくらいと考えられていた。

しかし、その後の分布調査の結果、もっと広い地域に分布していることが確

認された。そこで、今回の範囲確認調査では、それらの区域まで調査を拡張することにした。

この対象地区の中で、赤木線の東側一帯は、一応遺跡を避けたということで、昭和40年以来、住宅が急ピッチで建てられてきた。この住宅地域の調査は困難であったが、それでも許される範囲で、庭先までも場所を選んで調査した。

今回の調査は、既調査区を極力避け、未調査区域に重点をおき、大きく3地区に分けて実施した。

第1区は、前述のかつて遺跡中心部と考えられていた既調査区域の東側と西側。

第2区は、第1区の東側より中越神社西までと、中越北線—中越南線にはさまれた地域の大部分。

第3区は、中越南線と小田切川左側河成段丘上までであるが、今回の調査からは除外した。

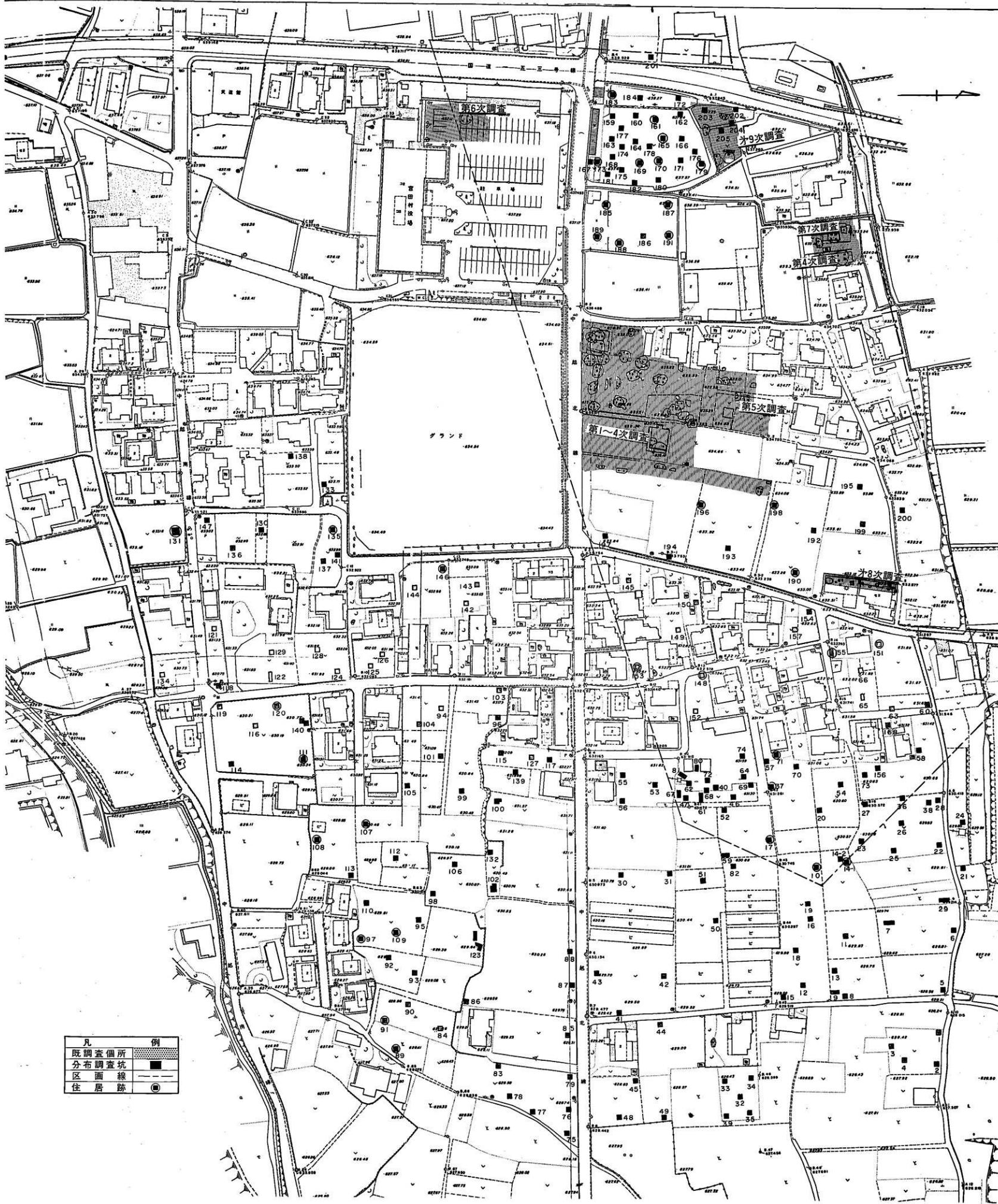
調査の基準は、国道153号線バイパスと中越北線が交叉する点を基点として、中越北線の道路北端を東にむけ、これを基線とした。この長さは560mあるが10mごとに南北に区切った。次にこの基線に対し垂直(東西)に10mごとに区切り基線をNとし、南からA～Z₄まで30区切りした。これによつてできる10m×10mのグリッドの名称を調査坑の位置名とした。調査坑は2×2m又は1×4mである。

調査は整理上、第1地区と第2地区に区分したが、第1地区的調査坑は次のとおりである。

10. 14. 17. 20. 23. 27. 37. 40. 46～47. 54. 57～74. 80～82. 145～155. 157～205までの82坑を設置した。

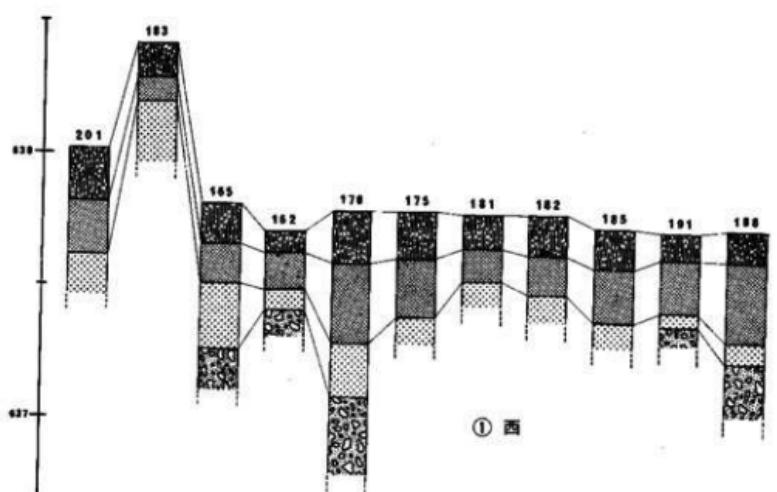
第2区調査坑は1～9. 11～13. 15～16. 18～19. 21～22. 24～26. 28～26. 38～39. 41～45. 48～53. 55～56. 75～79. 83～144. 156の113坑を設置し、両地区で合計205坑である。

中越遺跡分布確認調査図

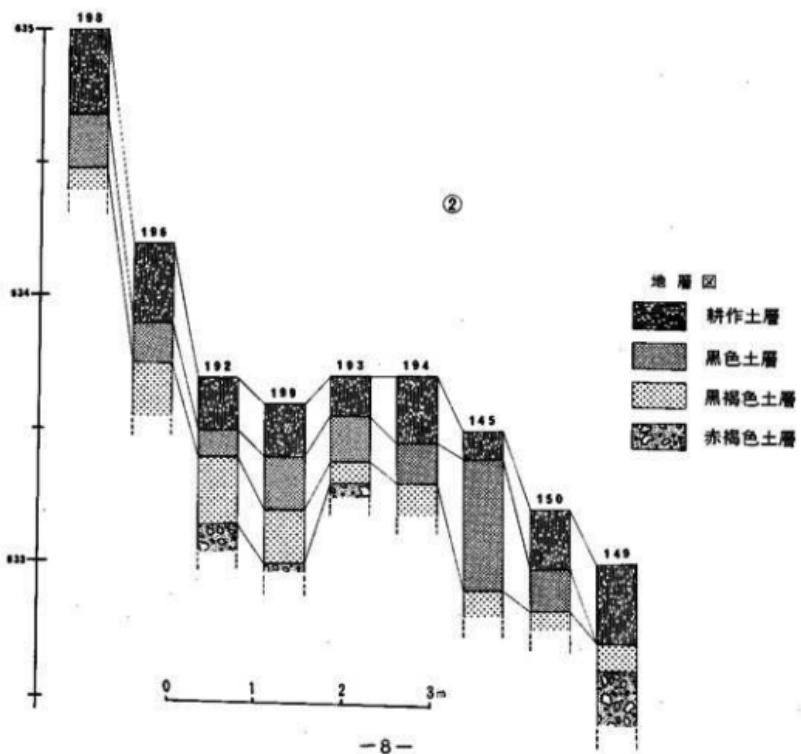


中越遺跡遺構配置図





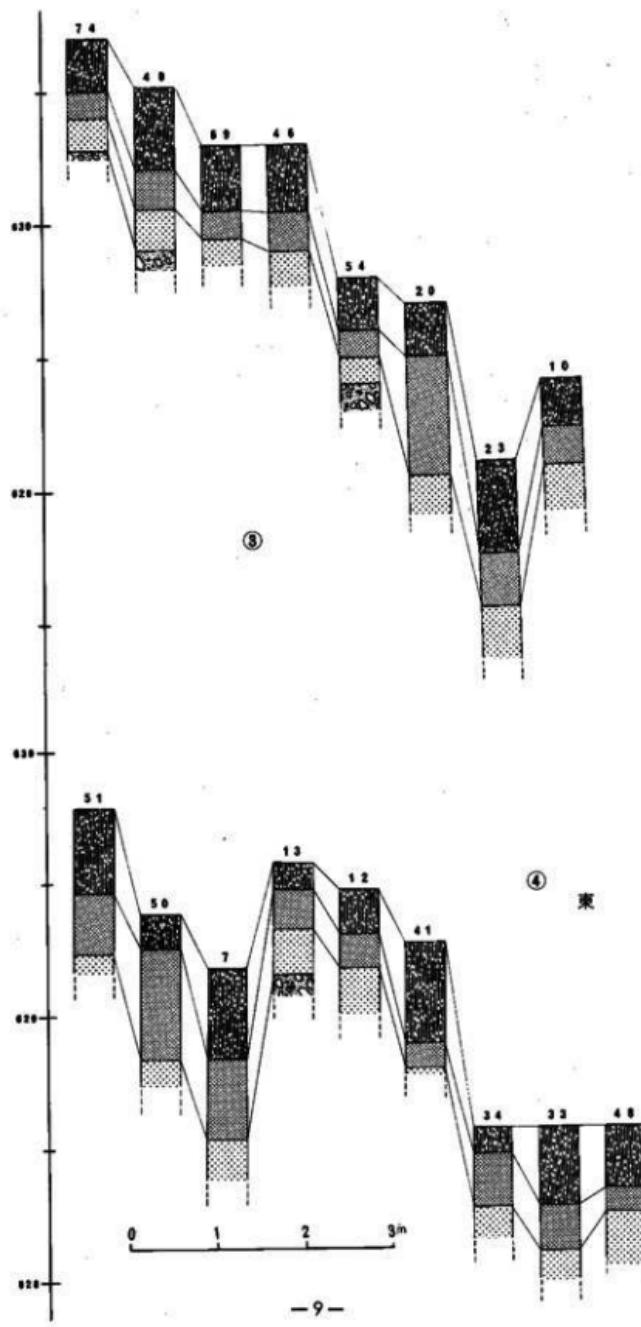
① 西



地層図

- 耕作土層
- 黒色土層
- 黒褐色土層
- 赤褐色土層

0 1 2 3m



(5) 土層の堆積状態 (図4, 5)

土層は主に調査坑の北壁を主として実測したが、調査の都合上他の壁をした例もある。

調査区域が相当広範囲にわたったので、全坑表示が妥当と考えられるが地形状から今回は中越北線にそって東西の堆積状態を表示した。調査坑のレベル基準は第一層上面で行なった。第Ⅰ層は耕土で20~40cm黒色土。第Ⅱ層は耕土の下部で耕作が行なわれていない層で黒色土。

水田の場合は耕土の下に10~15cm厚さの地場層が入る。第Ⅲ層は、場所によって異なるが20cm内外で黒褐色土層である。IV層はこれも場所によって差異はあるが、平均して20cm前後である。第V層はローム層である。ローム層は一定していない。第VI層は古期ロームを含んだ砂礫層である。

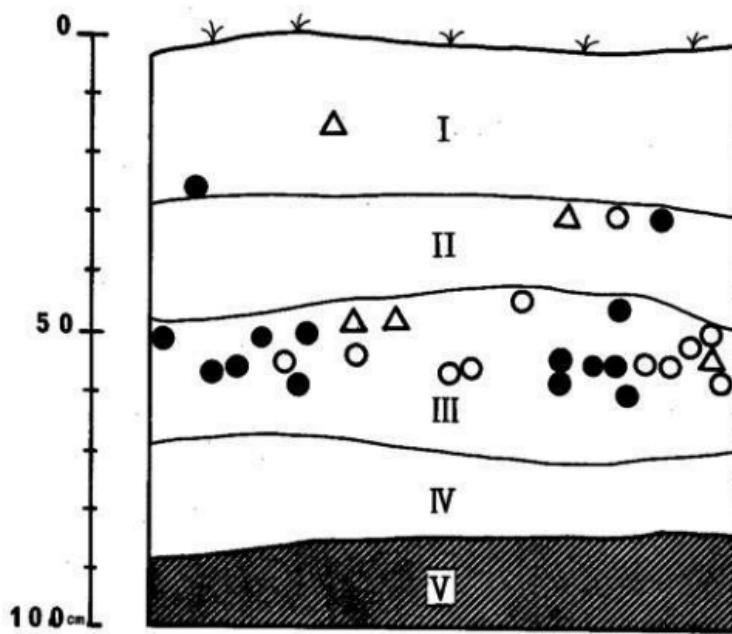
遺跡地の傾斜は、東に2%北に1%の角度をもった地形の上に立地している。

(6) 遺物の包含状態 (図6)

土層は主に調査坑の北壁を主として実測を行なった。今回の調査区域が相当広い範囲に及んだので、調査坑全体を図化することは困難であることから、柱状図は遺跡の中央を東西に走る中越北線に添って設置した。

土層の標高の測定個所は主に北壁にしたが、特定の個所については、その個所で定めた。

土層の標準断面は70坑を採用した(第6図)。第Ⅰ層は耕土で20~25cm黒色、Ⅱ層は15~20cm黒色土縄文中期、縄文前期の土器が認められた。Ⅲ層は20~30cm黒褐色土層で、縄文中期と前期が混じって検出されるが、縄文前期の遺物の方がやや下層に分布している。Ⅳ層の下部にはほとんど遺物は認められない。IV層は12~20cmで赤褐色土層で、遺物は全く認められなかった。V層はローム層である。



調査坑 70 S=1:10

凡 例	
●	縄文前期
○	縄文中期
△	石 器
■	ローム層

第 6 図 第70坑遺物分布図

(7) 遺構・遺物について(図2.8.9 図版3.4.8.10.12.)

1. 遺構

a、1区について(図2.8.図版3.4.8.10.12.)

本地区の面積は5.4ヘクタールである。調査が行なわれたのは合計90坑であり、そのうち住居址が確認されたのは次のとおりである。

第1表 A 繩文前期の住居跡

住居跡番号	64	65	66	67	68	69	70	73	74	75	76	77	78	79	81
調査坑番号	179	161	165	183	170	170	169	173	185	185	187	187	189	191	190

B 繩文中期の住居跡

住居跡番号	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95
調査坑番号	196	188	196	198	151	155	188 148	148	153	71	37	17	10	14

これにより、1次調査より今回の分布確認調査まで合計92軒の住居址を調査することができた。その外土壙・配石・ピット・マウンド等の遺構も確認している。

b、2区について(図2.9. 図版4.5.6.7.8.10.13.)

2区は1区の東側と南側に分布する地域である。面積は1.3ヘクタールの広い地域をわたっている。そのうち住宅とか工場地帯が三分の一を占めている地区である。今回の調査では住宅と住宅との空地にも許される範囲で調査坑を設置して、この区域の分布傾向を見る様に計画した。調査坑は合計115坑で、そのうち住居址として認められたのは、89.91.107.108.109.111.120.131.135.146の10軒である。

2区内の南端に位置していた第97坑は後期の住居址であることが確認されたが、これは3区の区画に入るのかもしれない。また、第120坑から図版8で見るような後期の注口破片が出土している。その外、第102坑の土壙からは条模文を施した弥生前期の壺と小形の甕(図版9-1.2.13-4)

が捨てられた状態で発見されている。これらの事実から2区と3区の境はある巾をもって交叉しているように考えられる。

2. 遺 物

a、1区について

調査区域における遺物の分布状態は、「調査坑別遺物出土一覧表」で判断できるが、さらに詳細に考察してみると、赤木線より東の畠地区の第20. 37. 46. 70. 74 の調査坑に遺物密度が高かった。特に第70坑では中越I群の土器が50片、II群、III群の土器が各2片出土し、I群のものが圧倒的に多かった。しかしこの地区全体ではI群とII群に属する中越期では古いとされている土器はほぼ同数検出されたのに対し、新しいとされるIII群の土器は殆ど発見されなかった。このことは、この地区が神の木期の分布範囲でないことを示している。

次に第148坑についてであるが、ここからはI群7片、II群1片とI群が多く、152坑では、I群4片、II群6片とほぼ同数であった。これらについても前述の傾向と同じであるといえる。

これに対し、151坑ではI群2片、II群1片に対し、III群は9片と多かった。このようなI・II・III群が混交して発見される地域は、1次～4次の調査地域であり、これは中越期でも新しい時期であるが、151坑もその類似地域と考えられる。

しかしながら、これら3坑とも住宅密集地の中の僅かな間隙を縫って調査できた程度であり、住宅の下にはたして遺跡、遺物が残存しているか心配される。

次に第1次～4次調査地区より西側の、国道153号線バイパスまでの地区においては第159～205坑まで合計37坑を調査した。

そのうち、I郡のみの坑はほとんどなく、I・II群の土器を共伴する坑は第169. 170. 175. 179. 180. 185～189. 191の合計11坑である。特にIII群の土器を多く出土するのは第188坑で、土器の56%がIII群の土

器でしめられている。このことは、第2次調査での2号住宅地附近の出土状態に似ている感がある。

第1～4次の調査区域の東側赤木線までの間に未調査個所があったので、この間に第192～200坑まで9個所の調査坑を設けて調査を行なったところ、第192、195、197、200坑ではI・II・III群の土器が共伴した。その他193、194、196、198、199の5坑からは、III群の土器は少なくI・II群のもののが多かった。この地区内の遺物の分布状態はI・II群が集中することと、III群が多いところと小区分があることが予測される地区である。あるいは、この地域には第8次調査の時発見された土壙、マウンドなどが分布しているところより、住居址以外の遺構が存在する地域かも知れない。

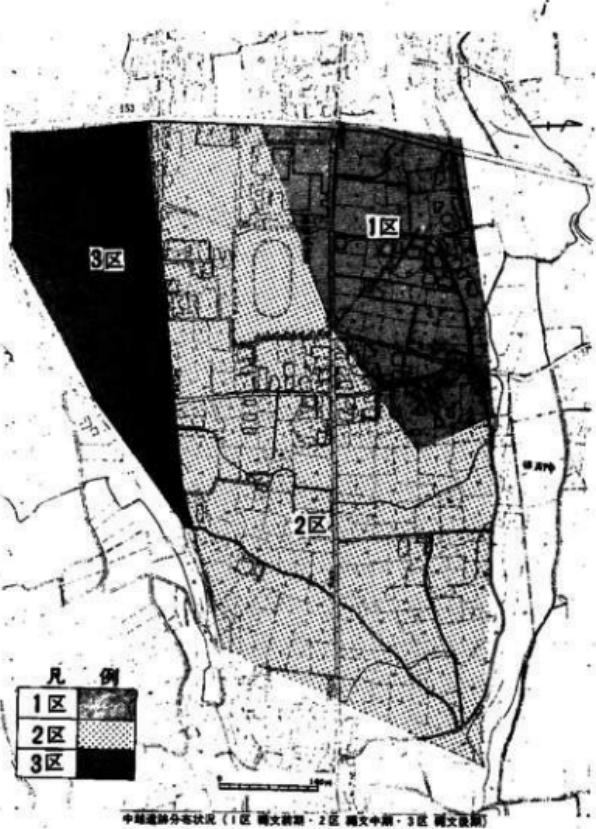
そのほか、少量ではあるが、縄文中期土師、灰釉、中世陶器などが発見された。

2区の遺物について、本地区的遺物は「調査坑別遺物出土数一覧表」で理解することができるが、総してみると、ほとんどの坑から縄文中期中葉と後葉の遺物が出土する。そして、115坑中住居址が確認されたのは、89、91、107、108、109、111、120、131、135、146坑で、その数は10軒で調査坑との比率は約1割に達する密度を有していることに注目しておかなくてはならない。

後期の住居址は97坑である。これより南は3区で縄文後期の遺跡である。特にこの区域で注目しなければならないのは102坑の土壙中より発見された弥生前期の土器であるが、この附近には縄文晚期も弥生時代の遺物も発見されていないことで問題になることである。今後の調査にまちたい。

図版の遺物について(図7、8)

今回の調査で発見された遺物について簡単に説明すると、中越遺跡の遺物の分類については、現在五次～九次の整理が終らない段階では正式な編年は決定できないので、今回の報告では、中越期の土器を大きくI・II・III群に区分した段階で報告するが、各群はさらに数類に細別される予定である。



第2表調査坑別出遺物出土数(1)

整 理 番 号	調 査 坑 番 号	縄文土器								赤生 (前)	土	須	灰	陶	石 器								その他の								
		縄文前期		縄文中期		縄文後期		縄文乾期							内	石	石	石	打	磨	黑	燒	縄文型石器	鐵	木						
		I	II	III	前半	中	後半	前半	後半						耳	鋸	錐	垂	匙	斧	石	燐	石	器	片	炭					
1	1									1																					
2	2																														
3	3																														
4	4				1																			1							
5	5																	1													
6	6					1																		1							
7	7																				2										
8	8																														
9	9																														
1	10	19	3							(2)	1												5	1							
11	11																							1							
12	12																														
13	13																														
2	14	1	2																			1	2								
15	15	1																				1									
16	16	1														1							2								
3	17			2											2								4	2							
18	18																														
19	19																														
4	20	1	4		7																	3	2	1							
21	21														1																
22	22														1	1	2														
5	23														2																
24	24																														
25	25			1														1					1								
26	26																1							1							
6	27															1						1									

()内は個体数

第2表 調査坑別出遺物出土数(2)

整 理 番 号	調 査 坑 番 号	縄文土器										弥生 (前)	土 須 灰 陶 内 耳 鍛 錐 垂 匙 斧 石 石	石 器					その他の				
		縄文前期			縄文中期			縄文後期		縄文期				打磨 黑 烟	横刃型 石器	磚	鐵	木					
		I 群	II 群	III 群	前 半	中 半	后 半	前 半	后 半	晚 期													
		I 群	II 群	III 群	前 半	中 半	后 半	前 半	后 半	晚 期													
28																							
29			1													1							
30																							
31					1																		
32						1													1				
33						2																	
34																							
35																1			1				
36																	1						
7	37	5	7			1									1	1	2			3	6		
58																							
39																							
8	40				2																		
41						14								5					1	1			
42																							
43					4	81								1		1	1			3	4	2	
44	1																						
45						2								1									
9	46	2	4			6	3									1			2	5			
10	47	1	4			2								1						2			
48						1																	
49																							
50	1																	1					
51	4	2			16														2				
11	52																						
	53	8	4			2												2	3				
12	54		1																2				

()内は個体数

第2表調査坑別出遺物出土数(3)

整理番号	縄文土器										弥生(鉄) (銅)	石器								その他					
	縄文前期			縄文中期			縄文後期		縄文			土師	須恵	灰陶	内耳	石	石	石	石	打磨	黒曜石	横刃型石器	縄	鐵	木
	I群	II群	III群	前半	中	後半	前半	後半	晚期	師	惠	釉	器	微	錐	垂	匙	斧	石	石	片	炭			
55	1		1			2																1			
56		2				4																1	2		2
13	57																								
14	58																1								
	59																					2			
15	60																								
16	61						3																		
17	62						1										1					1	1		
18	63	1																					2		
19	64	1	4				1																4		
20	65		1																						
21	66																								
22	67																								
23	68																1					2			
24	69		2														1						1		
25	70	50	2	2		5											1					1	3	1	
26	71		2			3																1	1		
27	72																2						1		
28	73																								
29	74	5	6			3											2					1	1	3	
	75		1		8																				
	76				6	1																			
	77					14												1				1	5		
	78					2											1								
	79																								
30	80	1	1			3											1								
31	81					1																1			

()内は個体数

第2表 調査坑別出遺物出土数(4)

監 理 番 号	調 査 坑 番 号	縄文土器						新 生 (前)	土	須	灰	陶	内	石 器								その他の								
		縄文前期			縄文中期										石	石	石	打	磨	黑	鐵	木								
		I	II	III	前半	中	後半							師	恵	軸	器	耳	鋸	椎	匙	斧	石	鐵						
		群	群	群										片	炭															
82	3 1						9															3	4							
83	1						16																							
84							72														3	1	6							
85							20														1	2	2							
86																														
87							15	1							1						1									
88							2														2	1								
89							45								1						1		5							
90							2 5														1		2							
91							2 54	(2)												2	2	1								
92							4 56													2	1	2								
93							4 21													5	2	1	1							
94							14														1									
95				1 5	156					1										1	4	2								
96				1	1																1									
97				1 7	137										3		1		1	1	5	1								
98				1 28	937														17	6	3									
99				4	45																1									
100															2															
101							11								1					2										
102								(2)																						
103	1 2			3	7															1	1									
104				1 15	15															2										
105				2	23					1										1										
106	3		8	57	184														1	4										
107					156					1	1	1							1	1										
108					27														1	1										

()内は個体数

第2表 調査坑別出遺物出土数(5)

整 理 番 号	調 査 坑 番 号	縄文土器								亦生 (前)	土	須	灰	陶	内	石 器								その他の								
		縄文前期		縄文中期		縄文後期		縄文								石	石	石	石	打	磨	黑	耀	擦	鐵	木						
		I 群	II 群	III 群	前 半	中 半	後 半	前 半	後 半							鋸	椎	垂	匙	斧	石	石	器	片	炭							
109								256															11									
110								1135								1			1				2		2							
111				210	126		6																10	1								
112				4	8																		1	2								
113					26																		1									
114				6	1	178																	2	2								
115																																
116			1	2	36											2	3						1									
117																																
118				4	18											2	1						1									
119																																
120				30	3											2	1						6	3								
121				2	49																		2	1								
122					38											6	2	1					3									
123					122												5						1	1								
124																																
125																																
126				3	15	1										1							1	1								
127																1																
128			1	18	140																		1	3	2							
129						21																	2		2							
130	1			1	53											1								1								
131				1	9	57	4										1					5	2	3								
132																																
133	1			2	59																		2	4								
134						1																	1									
135					20	190	2									1							8	1								

()内は個体数

第2表調査坑別出遺物出土数(6)

整 理 番 号	縄文土器										弥生(開)	石器								その他の						
	縄文前期			縄文中期				縄文後期				縄文晩期	土	須	灰	陶	内	石	石	石	打	磨	黒	縄	鐵	木
	I	II	III	前	中	後	前	後	半	半	半	器	耳	齒	錐	垂	匙	斧	石	石	石	刀	磨	縄	鐵	木
	群	群	群	群	半	半	半	半	半	半	期	師	恵	釉	器	耳	齒	錐	垂	匙	斧	石	石	石	刀	磨
136					60	1															2					
137					137	3																1				
138					60																1	2	2			
139																										
140					14							1	3	2								2				
141				1	81																5	3	2			
142					1																			2		
143					1																					
144					3	1																				
32	145																									
	146				6	37																1				
	147	13	5		8	26	1														2	3	1			
33	148	7	1																			2				
34	149	2	4									1		1								1	1			
35	150		4	1																	1					
36	151	2	1	9																						
37	152	4	6																		1	1				
38	153	4																			1	1		1		
39	154																									
40	155																									
41	156																2									
42	157																									
43	158																									
44	159																									
45	160																									
46	161																				1	2				
47	162																				1					

()内は個体数

第2表 調査坑別出遺物出土数(7)

整 理 番 号	調 査 坑 番 号	縄文土器										弥生 (説)	石 器							その他の							
		縄文前期			縄文中期			縄文後期		縄文後期			土	須	灰	陶	内	石	石	石	打	磨	黒	縄文型石器	鐵	木	
		I 群	II 群	III 群	前 半	中 半	後 半	前 半	後 半	後 半	後 半		師	惠	軸	器	耳	鍬	錐	垂	匙	斧	石	石	器	片	炭
48	163		1																								
49	164																										
50	165	2	11																					10			
51	166	1	5														1	1									
52	167	1	1				1																1	1			
53	168	1																									
54	169	21	20	2																				2	1		
55	170	11	58	10														1						1	51		
56	171	1	8	1																			1	2			
57	172																										
58	173	1	6				2																	1	1		
59	174	1					1										1							1			
60	175	8	32	10																				2	8		
61	176	10	11			1																			1		
62	177															1									1		
63	178		5																			1	2	6			
64	179	2	19	4			2										2		2					16			
65	180	15	75	8																				1	20		
66	181	1	20														1						1	9			
67	182		4																				1	2			
68	183		4			1																					
69	184		1																				1				
70	185	11	9	4														1		1			17				
71	186	7	14	18																				10			
72	187	3	24	25												1								1	22		
73	188	42	1B1	299												1		2						4	58	1	
74	189		4	16	4																		1	9			

()内は個体数

第2表 調査坑別出遺物出土数(8)

整理番号	調査坑番号	縄文土器										弥生(前)	石器								その他								
		縄文前期			縄文中期			縄後		文期			土	須	灰	陶	内	石	石	石	打	磨	黒	煙	鐵	木			
		I	II	III	前半	中	後半	前半	後半	前半	後半		師	恵	輪	器	耳	鋤	錐	垂	匙	斧	石	石	器	片	炭		
		群	群	群	半	中	後	半	半	半	半		1										1	1	1				
75	190	12	19																										
76	191	18	32	13																									
77	192	9	54																										
78	193	4	9	2																									
79	194	12	22	1																									
80	195	9	15																										
81	196	49	23	5																									
82	197																										2		
83	198	18	64	1													1						3	11	1				
84	199	6	14	2			1												1					6					
85	200		2													1													
86	201					1																		1					
87	202																												
88	203																												
89	204																												
90	205																												
		合計	415	825	556	23	248	↑	17	7 (2)	0	(4)	27	5	16	51	7	7	3	1	9	130	105	417	1	36	6	1	0

出土遺物について

第Ⅰ群土器〔縄文前期の土器〕 (図8)

1は104坑出土。器壁は0.3～0.5cmほどの薄い土器で指痕を有し、精選された胎土で堅く焼成されている。器形は深鉢形と思われる。縁帯部に半截竹管を使用した細線を縦位、斜位に施している。頭部は同一施文具で左から右に強く押引いている。

2は70坑出土。器壁は0.2～0.4cmの薄手指痕文土器で精選された胎土で堅く焼成されている。器形は深鉢形と思われる。縁帯部に半截竹管具により鋸歯文状に施文されている。口縁部の刺突は左から右へ押引いている。

3は192坑出土。器壁は0.25～0.3cmの薄手指痕文土器。胎土は良好で堅く焼成されている。

4は195坑出土。3の土器とほとんど同じものである。

5は169坑から出土。器壁は0.25～0.3cmの薄手指痕文土器である。器形は深鉢形と思われる。器面には半截竹管具にて斜位に施文されている。口唇部に押引き状の刺突文を施す。

6は169坑から出土した土器で、5の土器と同類のものである。

7は169坑から出土した土器である。器壁0.3～0.5cmの薄手指痕文で、口唇部に左から右の方向に刺突による押引文が施されている。器面は半截竹管具により鋸歯状に施文されている。縁帯部と胴部との境は隆帶状に高くして、しばしばまみあげたような刻み目を施す。隆帶は粘土紐の貼付によるのではなく、縁帯部をつくる粘土枝を胴部上の端の外側に少々重ね合せて接合したのではないかと思われ、接合の強度を増すのも兼ねて、装飾的に刻み目を施したのではなかろうかと思われる。

8は179坑出土。口縁部で器壁は0.4～0.5cm、薄手指痕文の土器。色調は赤褐色で、胎土は精選され焼成良好。器面にはわずかに擦痕が認められる。

9は190坑出土。器壁は0.6～0.8cmと中厚手で、口唇部の下方に4～

4.5 cmの巾に縁帶部が作られている。この縁帶部には4条1細の植物の茎状のもので細線を縦位、斜位に施している。縁帶部と胸部との境は前述7の手法と同様なやり方で接合させている。

10は185坑出土の波状口縁の土器である。器壁は0.4～0.5 cmの中厚手で指痕があり、縁帶部には4条の並行波線文が1.0～1.2 cmの間隔で斜位に交叉する方法で施文されている。縁帶部の中は4.8 cmで、胸部と縁帶部の境には縁帶部を施文したのと同一器具で縦に押圧したと思われるあとが認められる。

11は176坑出土の土器で10とほぼ同類のものであるが、口唇部に荒く篦状器具で刻み目が施されているところが異なるところである。

12は148坑出土の土器。器壁は0.5 cmで口縁部と縁帶部の巾は4.5 cmで器面には1本または2条の細線が斜めに交叉する状態で施文されている。縁帶部と胸部の境は隆帶部をつくり、その隆帶部には篦状器具で斜めに刻み目が施されている。

13は153坑から出土した土器である。器壁は0.4～0.6 cmと厚目のもので、12とほとんど同じ系統である。12の隆帶より高く刻み目も大きい。口唇部に篦先でひいた刻み目がある。

第二群土器〔縄文前期の土器〕（図8）

14は180坑出土の土器。器壁は0.6～0.8 cmで波状口縁の中厚手である。口縁部下頭部までの間に左右から引かれた幾条かの沈線は菱形の文様を描き出している。中越特有の文様である。

15は170坑出土の土器。器壁は0.6～0.8 cmの中厚手、口縁は波状口縁で垂下隆帶のある無文のもので、器形も14とは異なり頭部のくびれの少ない土器であるが、15の土器と同じものである。

第三群土器〔縄文前期の土器〕(図8)

17は170坑より出土した土器で、器形は0.6～0.8cmの中厚手平底深鉢形と思われる。口縁部に左から右へ先が二つに割れた棒状の刺突文が施され、その下部に10cmの無文帯をめぐらし、その下に3cmの斜縄文、2cmの無文帯斜状文といった文様構成である。

18は151坑出土の土器である。器壁は0.4～0.6cmで、纖維を含んだ斜縄文の深鉢形である。

19は151坑出土の土器である。器壁は0.4～0.6cm、縦位に単節の縄文が施されている。

20は180坑出土の土器。器壁は0.6～0.7cmで結節の羽状縄文を施した平底深鉢形と考えられる。

21は185坑出土の土器である。器壁は0.4～0.5cmの複節斜縄文を施した平底深鉢形である。

22は81坑から出土した土器。器壁は0.6～0.7cmの羽状縄文である。

23は185から出土した土器で、文様は斜状文である。

24は180坑、25は170坑出土の羽状縄文の土器である。

26は175坑出土の土器で、器壁の厚さは0.6～0.7cm。一部の表面をのこして大部分剥ぎ落し、その一部に先を数条に割った施文具で押引いた文様が窺える土器である。

27は188坑より出土した土器で、器壁は0.6～0.8cm。口縁部文様は口縁部の下部から長さ1.2cmの巾で左から右へ3条爪形文が施文されている。

28は175坑から出土した土器で、器壁は0.6～0.7cmの口縁部で、口縁にそって長さ0.8～0.9cmの連続爪形文が一条施され、その下は無文帯の土器片である。

縄文中期の土器（図9、2区出土）

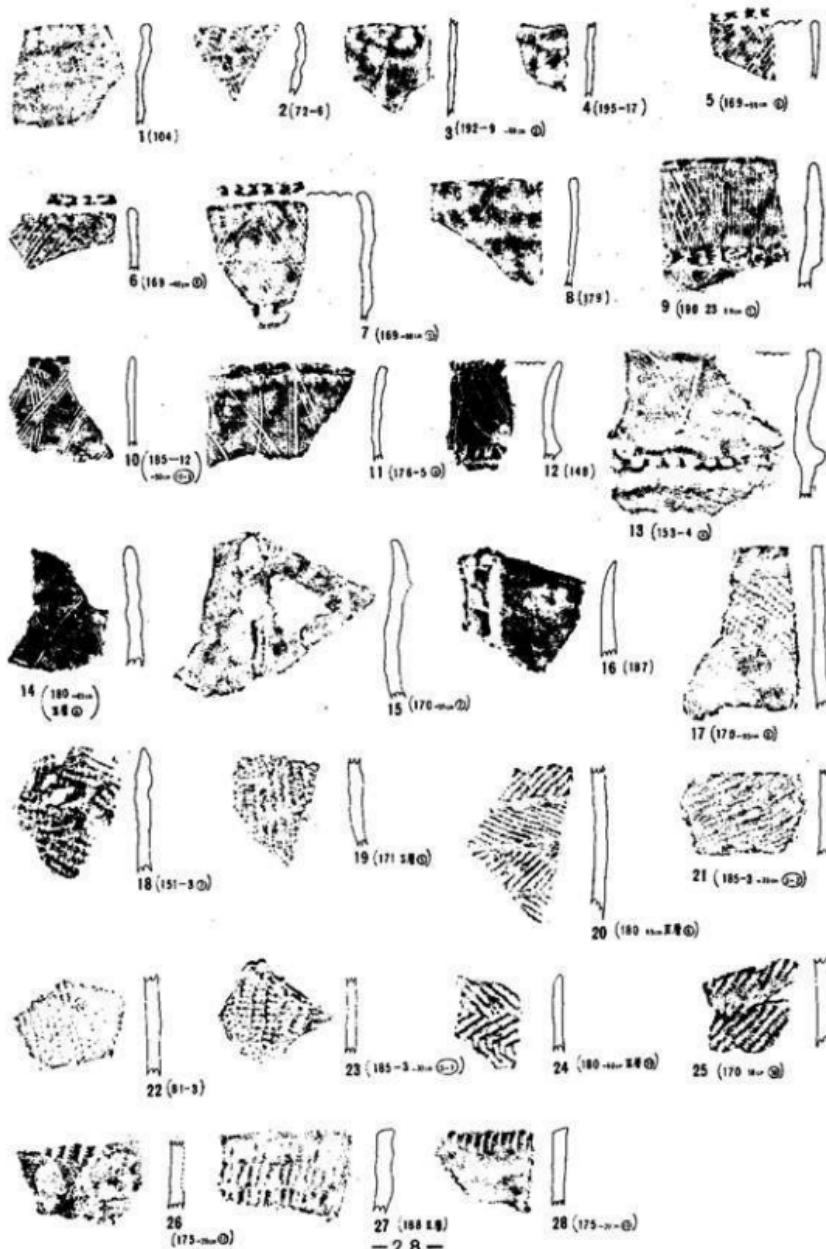
1は46坑、2は43坑、3は106坑出土の土器である。文様構成から勝板式に比定されるものと考えられる。

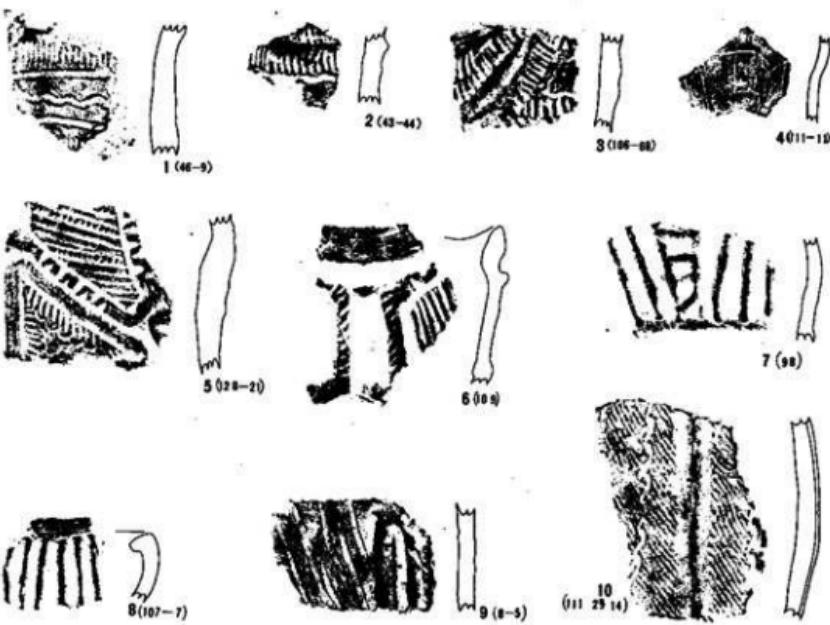
4は111坑出土。縄文中期の初頭に位置付される土器である。

5は128坑、6は109坑出土の土器で、井戸尻式に比定される。

7は98坑、8は107坑出土の土器で、いずれも粘土紐を縦位、横位に貼付けあり、縄文中期後葉の古いところに位置付けられる。

9は8坑、10は111坑出土の縄文中期末の中頃に位置する土器である。





(8) 結び（遺跡の範囲）

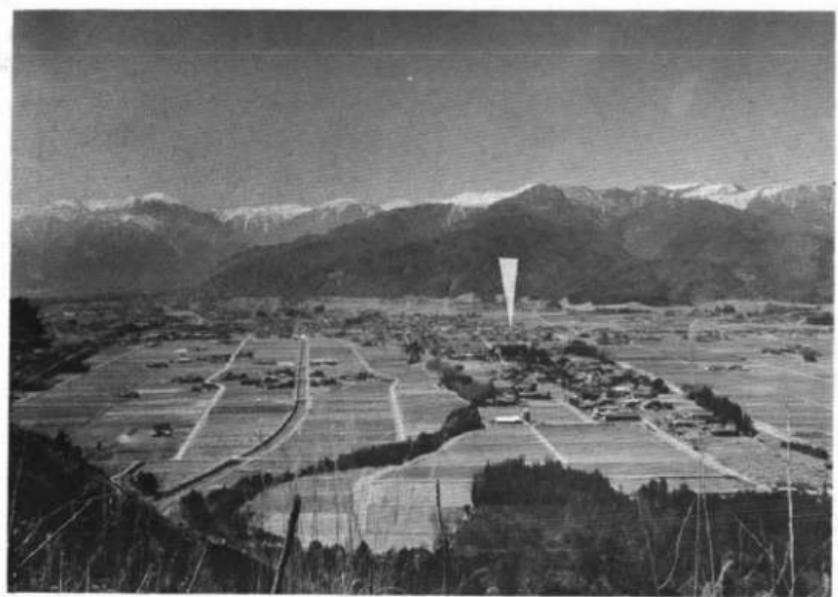
以上論述してきた結果、調査の目的である遺跡範囲の想定を試みるならば、次のようにまとめられるであろう。本遺跡は大きくは1区（縄文前期）、2区（縄文中期）、3区（縄文中期・後期）の3地区に区分することができたが今回の調査のねらいは1区の縄文前期と2区の縄文中期の区域の範囲を明らかにすることに焦点を絞って調査を行なった。

1区の西限が国道153番線バイパス線あたりに求められることは、遺物の出土状況から推して論をまたないところである。同様にして東限は中越北線の北第10調査坑の地点附近として大過ないと考えられる。次いで南北の範囲をみると、北限は大沢川の右岸段丘上まで、南限は宮田村役場の食堂北隅—中央グランド北西附近—中越北線と赤木線を交叉する地点—第67坑を結ぶ線であることが、遺物の出土状況から推して考えられる。次いで1区縄文前期の分布範囲は、東西370m、南北160m、面積約5.4ヘクタールにわたることが確認された。また、遺物の包含層は、第Ⅲ層黒褐色土層中に集中していることも合せて確認された。（第6図）

2区の西限は、国道153号線まで。北限は1区と境をなしたあと大沢川右岸を東進する。東限は中越諏訪神社付近まで。南限は中越北線とほぼ平行である。面積は約13ヘクタールに達する広大な遺跡であることが確認された。

今回の調査では2区まで、3区（縄文後期）の地区迄にはおよばなかった。既調査と今回の調査を通じて知り得た重要な事項の二、三をあげるならば、まず第一に縄文前期の集落の規模がわかったこと。第二は縄文前期初頭に位置する集落が既調査の西北と赤木線の東にあり、中心の既調査区域には、縄文前期初頭の集落に神之木期の集落が重複した形となっていることが確認された。なお、この区域内には土壙及びマウンド等が発見されていることから、本遺跡を全般的に調査することができ得るならば、空閑部分も含め集落としての全機能の構成が明らかにできるだろう。

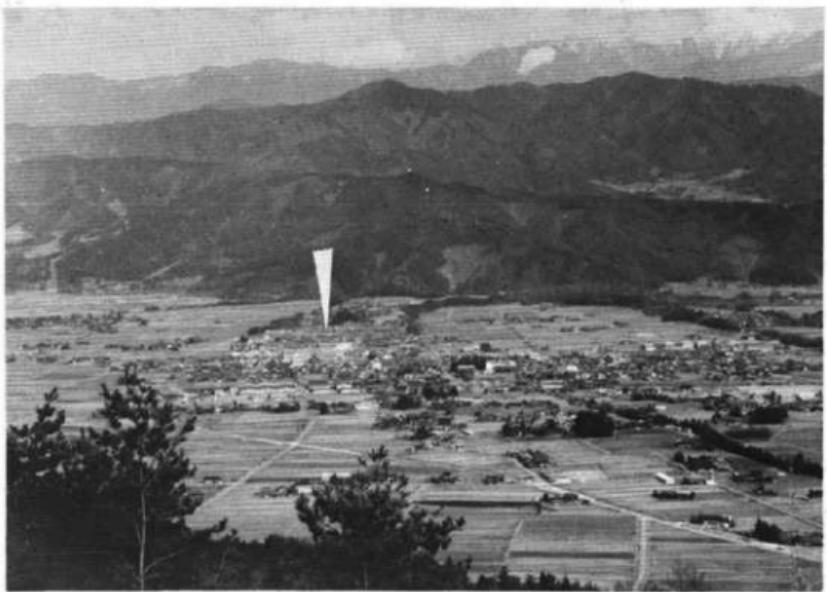
終りに、中越遺跡がどのような形で今後保存されるようになるか、未だ予知できる立場ではないが、保存の必要性を提唱した者としてもっと具体的な保存と活用の方策を立てて世に示し、理解を深めてもらわなければならない責務があることを自己に言い聞かせ、結びの言葉に代えさせていただきます。



① 遺跡遠景（東方より）



② 遺跡全景（東方より）



① 遺跡遠景（西方より）



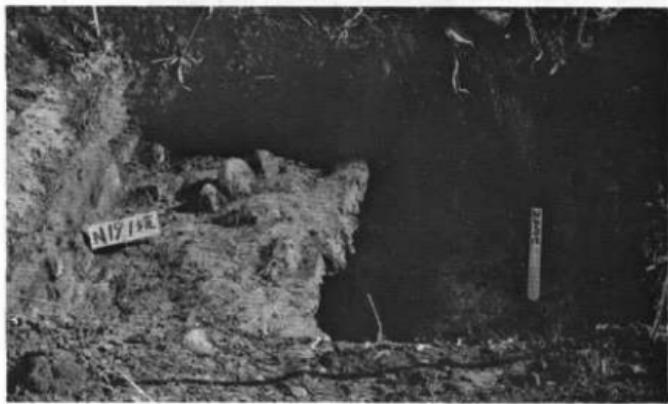
② 遺跡全景（南方小田切川の段丘上）



①188調査坑
83号住



②190調査坑
81号住



③191調査坑
79号住



①112調査坑



②161調査坑
65住



③196調査坑
82・84住



①102調査坑
弥生前期の
壺出土



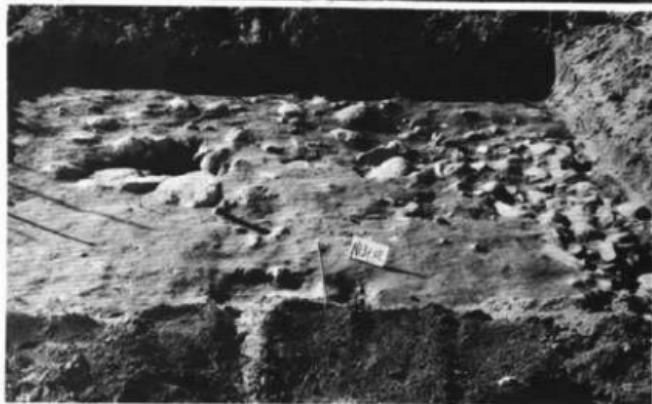
②86調査坑



③97調査坑



①112調査坑



②131調査坑
縄文中期と
縄文後期が出土



③137調査坑



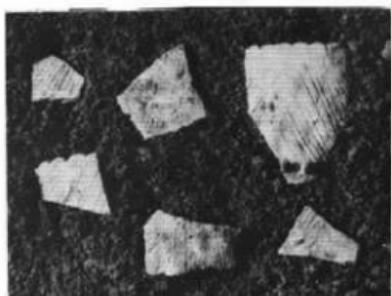
①108調査坑



②104調査坑



③151調査坑
地層断面



169 坑



196 坑



191 坑



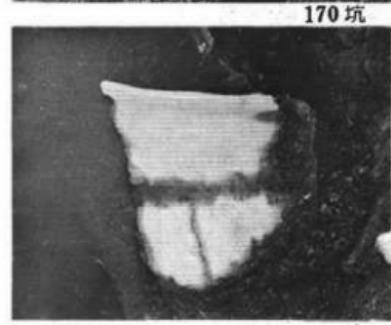
153 坑



170 坑



188 坑



111 坑



120 坑



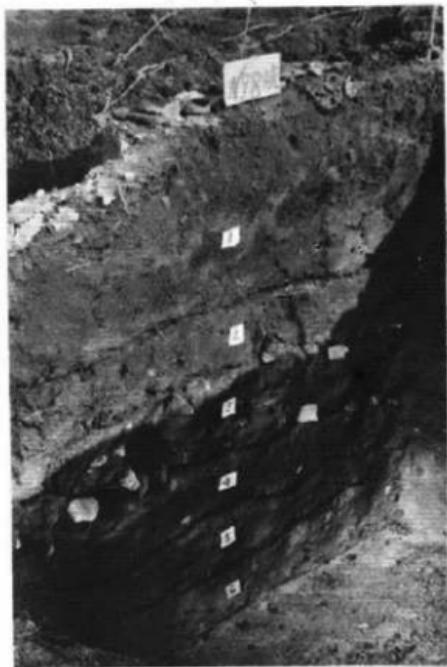
①102調査坑
弥生前期の土
器出土状況



②102調査坑
弥生前期の
土器出土状況



③120調査坑
石皿出土状況



① 98調査坑地層



② 169調査坑地層



③ 166調査坑地層



①第1区の調査
状況



②第1区の調査
状況



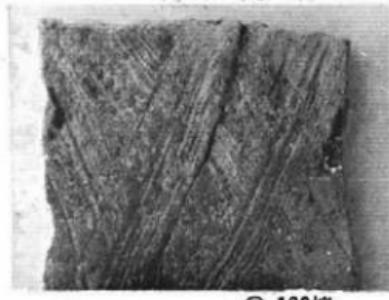
③第1区調査
の測量



① 147坑



② 176坑



③ 180坑



④ 153坑



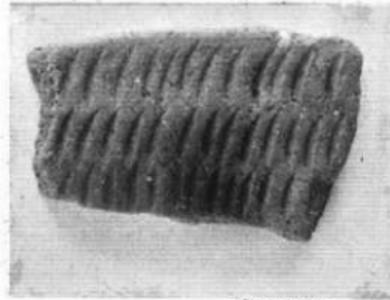
⑤ 170坑



⑥ 188坑



⑦ 180坑



⑧ 188坑



① 91調査坑



② 91調査坑



③ 102調査坑



④ 102調査坑

中越遺跡範囲確認調査報告

1979. 3.

編集 長野県上伊那郡宮田村教育委員会
発行 長野県上伊那郡宮田村教育委員会
印刷 長野県上伊那郡宮田村 宮田印刷

